

# 連合赤軍の精神に対する我々の態度

1972.3.16



卷之三

この間の連合赤軍の群馬、長崎、県山中の大量逮捕から始まり、10月間の銃撃戦、以後にリニヶ殺人事件として政治警察商業新聞によって暴露された、内部肅清に至る一連の事件は、日本階級斗争の中に革命戦争を認め、それを実現するかどうかをめぐって、かくてない大きな政治的分裂をつくりたして、我々は連合赤軍の銃撃戦の遂行を主張し、ついでそれが全階級的な政治的分裂を革命戦争の側へと組織し、にもかかわらずこの銃撃戦が連合赤軍の組織的壊滅(ひさいかえ)に斗われたものであったという赤軍敗(ひきこ)ひ、日共革命左派神奈川県委員会の党的敗北を、真剣に総括して非合法党建設を更に一步前進させるための貴重な糧

連合赤軍の銃撃戦と革命戦争  
5人の連合赤軍による山莊への立てこもり、  
前めての銃撃戦では、日本階級斗争における  
等は、満州事変など、(秋父事件)、  
はなく、追いつまつての銃撃戦であった。ところが、  
え、10日間を圧倒的に優位に敵に討たれた。  
全く沉默して押し通し徹底的に非妥協的で、  
に斗し、2名の敵を殺し(1名はオジ様の  
隊長)12名の敵に重軽傷を負わせ、日本革命  
戦争を大きく前進させた。

戦術的教育としては市街戦をめぐる教訓が多い。手投げ弾仕掛け爆弾を有効に使える、より大きな損害を警察に對して与えることがでいたのである。現在の警察力の大範囲（部分的には自衛隊）へリコ・ターナーなどの敵に対する対応も非常に良くなかった。だが何よりも5人の連合赤軍の敵に対する非妥協性こそ、彼らが組織的壊滅に近い打撃を受けたにもかかわらず、階級斗争全体に深い前進的な影響を与えたのである。

政治警察の攻撃が連合赤軍をして戦いを遅ぶか、戦わずして倒れるかの岐路に置いたとき、彼らは戦いを選び、たった5人で一とえ人質をとったとはいえ、800人の敵警察を相手にして一日間も二つたえ、1億円の金を支出させたのである。もし彼らが戦いを選ばなければ、連合赤軍の組織が壊滅といふことだけで終り、この場合の労働者階級の意気沮喪、革命的左翼の混乱はあるかに大きな不幸を招いたであろう。

彼らが斗争を選んだからこそ、労働者階級は、革命戦争の遂行のための貴重な教訓を手にすることができるのである。

一方ではヒスティリー的な反革命的で、一方では保守して10日間も徹底抗戦を続けるのが「この」のようないデオヨリ一をもつて「この」の「この」いう疑問と勤懃、このよつた全階級的な政治的今後は、革命と反革命とが双方ともに武装して対決しあう、そのよつた階級斗争の局面へとゆきりと惹つまり、中間立場をとついた多くの人々。勤懃は、兩極に分解し、ぶり分けられていくであろう。まさに、革命は「歴史の機関車」であり銃撃戦の実物教育によって、労働階級人民の革命戦争に対する認識は急速に高められたのである。

日本における革命戦争は爆弾の使用から、さらに銃火器の使用にむかって、るしくかわぢてはならない。階級対立の非解釈性はますます深化しており、帝曰主義者は一步アラウトロア革命戦争にむかって、債金奴隸としての労働者階級の債務はますます強まつてゐる。この情勢の中で、政治斗争の問題は、革命戦争として考えられなくてはならぬ。

帝曰主義國家权力は、資本家階級が労働者階級を資金奴隸として抑圧しておいための暴力組織であり労働者階級はこの帝曰主義國家权力を暴力革命によって粉碎破壊(倒し)て、プロレタリア階級が独立裁決力を樹立することによって、債労効制の実現にむかわなくてはならない。労働者階級の革命的暴力こそ、プロレタリア階級が独立裁決力の第一条件である。労働者階級にとって革命战争に決起する以外の道は全くありえないのだ。我々共産主義者同盟(РКП)は、連合赤軍のすべての教訓と学びアル音アジー、共産マルクスの革命戦争に対する攻撃をもよお

連合赤軍の党的敗北と革命戦争の政治化と自ら

連合赤軍は党としては敗北した。彼らは自らのつくりたした階級的影響を組織していく力を失っており、彼らに代わって我々がその任務を負わなくてはならないのが、我々の党的敗北の最大の原因はない。彼らが自らの組織路線を「軍から党へ」としたところにある。その結果、日大暴行は左派は70年12月18～71年2・17「武器奪取」斗争を党の武装としてではなく、「アーチ型蜂起」「革命戦争」として位置づけられた。赤軍派の71年2月現金奪取斗争もまさにこの政治的意志統一の力ナメにしてこそ、統一赤軍結成が目指されたのである。

だか、こう「集中」は我々が実現しつぶる非合法党における中央集权主義につながるのではなく、「むしろ分権主義」の裏返しとしての水平主義があり、山中の下ける多数の結集、共同生活、「共生主義化」論を導いた。日共革命左派の場合、「解放の旗」18号において「行動的軍」から「鉄砲を指導する軍隊」「鉄砲を指導する党建設への挑戦躍を鳴え、武器奪取斗争と降の党内斗争を一応締めくり、組織再建に入つたが、彼らの場合、「鉄砲から國家が生まれる」「革命の勝利の決着は203米以内で決まる」という毛沢東の言葉

「鉄砲」、「銃撃戦」そのものによる政治的意志統一は、鉄砲を扱う人々が「共産主義化」しなければならぬ」という、一種の「党の共産主義の母胎」論である。脚点にすることによつて基礎づけられた。だが、20数名による多くの人々間の山中の結集、共同生活という彼らの組織の方法は、この「鉄砲」、「銃撃戦」そのものによる政治的意志統一、「共産主義化」論が具体化したものなのであり、数人に対する肅清も水平主義的傾向に対する規律による斗争の帰結であつて、「共産主義化」論は、思想的政治的建設へ向ひたのである。この非合法党建設に対する立場の誤りによつて、彼らは政治小説、諫諭に於ける轉向者までも生み出されたのである。赤軍派の場合、M作戦において、それが必ずしも自らのケルーフの自らの攻撃のイニシアチブといつてマリゲーラ組織論そのまゝに中絶軍が數軍團に分れて戦争し、その結果組織としての全体的意志統一が乱れること

葉は、前者は暴力・革命論に反対して持久戦を主張し、後者は武器論に反対して持久戦を主張している。この間に、党建設の力ナメを鉄砲そのもので、今回の工作を主要に以て、赤軍派主流派（中央軍）を二つの路線に分けた。彼らは武器奪取斗争、ソ連、党中央の分離をはかりつとしめたが、どうやら、純局組織全体が地下活動に入ったといわれている。革命争は遂行する以上、先が非合法党ではなくてはならぬのは当然であつて問題はないが、軍事委員会として指導の中、中央軍権主導主義を實現する運動の機能を失はせ、かくして、日大革命左派はスリーリン主義の未完形のため、非合法党建設におけるマルクス・レーニン主義の継承の觀念を欠落させ、党建設の力ナメを鉄砲そのものに依ること、つまり、新党建設へ入りこみ、連合赤軍派の二本柱、連合赤軍派へ進出したのである。然しながら、本來の分权主義、水平的統治を実現することからはず、このことは政治警察に対する組織的敗北につながったのである。

暴力革命、古界單16.7.18

る金砲を扱うて、あるいは銃撃戦を遂行することはできない。日本によれば、革命軍が爆弾の使用から、さうに金砲大砲の使用にむかへている。しかしむかわなくてはならないことは、革戦であれど正しくて、金砲を扱うことなどが、党建設の力なりに直結してゐる。正しい、しかし間違なのは、日本における革命戦争は爆弾、火薬彈のみでなく、銃砲の使用にもむかへてゐる。その使用にむかへているし、むかわなくてはならぬことは、

中南米、ベトナム、チエーバとは  
寒い冬があり、かつ明治維新後  
の資本主義化が三次大戦後  
單に農地改革が行われ  
軸として打破を目的とした土地  
統合とした。日本では、山岳アリヤ  
しえない日本では、山岳アリヤ  
を移動して一百年を過ごすことを  
自らに課すあり、結果的に

主義革命、人民民主主義統一と政治路線と赤軍派の「OLAS」路線（世界党）世界赤軍、世界主義革命戦争を打つ社会主義革命と、その政治統一と、当時の政治路線と、プロレタリア争による正場された。一定の戦術協定として結成されたのではなく、連合軍と統一赤軍と新党とされ、国际非合法党建設の路線とします。遠いから、覚選の根本問題はとしての权力問題についての解説などを「鉄砲と殴り合はれ、今回の作戦の計画の中では連合赤軍は統一赤軍結成から更に新党結成に踏み切った。よつてあるが、党的対立を鉄砲の意、もの、銃撃戦、そのような政治的意志統一に解消したこの新党は、肥能を抜き、仁々の共产党化論とその結果としての規律による水平主義との斗争によって团结することになり、かつ20数名の外敵の人間の仲間中の結集と共同生活という組織化の方法を確立し、必勝活動について決死の内局点と見て、且威として

-3-

この如きは、必ずしも「政治的・組織的」な手段によるものであつた。しかし、その結果として、軍隊の士氣が一層高まつたことは、間違いない。そこで、この段階で、軍事的手段による統制は、より強化されるべきである。そのためには、軍事的手段による統制を強化するための、より強力な組織が必要となる。そのためには、軍事的手段による統制を強化するための、より強力な組織が必要となる。

## スパノ問題と共産主義者の党

スパイ問題として宣伝されてゐることに關しては、我々はほんの情報しき持ちあわせでないが、連合軍の内部、其の静はむろ動搖した。腕落ち者に対する組織防衛の觀点から、處分してあるところについた。その作戦のような战斗に直面して、「る」と「スパイ」を發見して殺すのは、正しくない。また、スパイがなくとも敵との战斗に入つて、際の敵スパイでなくとも敵の銃撃を受けた者は、銃撃しなければならない。この二つは、なほ處分の基準は、一つには党組織が、二つにはソ連の内政権力との関係で、どれほどの危険にさらつてゐるかの度合によつて決まる。だが、最も尙楚なのは、スパイをすべて殺

革命戦争と非合法黨の發展

問題なのが脱落者が組織のどよつと弱虫にして形成されるのがを総括する組織的保障を持ち得る敵性論理を持ちこんでいるものと、そつてないものを区別して処し、動搖する者を教育し、再び団結を固めていくことが、きなかったのである。

「共産主義化」いう考へ方は資本主義社会に之と基礎の上に立つて共産主義的原則の成立をす、そしてその実体を規律に求めるところだが、こうよつた思想は資本主義を美化している。

共産主義運動は現に存在するアルジヨアジーとプロレタリアートの非和解的な階級対立から出発して、債券抑制私有財産制を廢絶することを目的とするのである。党の田舎はこの目的にそつて、現にある階級対立の非和解性の具体的な發展段階に即して打ち固められなければならない。階級斗争は必ず党の中に反映するのであり、革命党は党内斗争によって、何かプロレタリアートの全体的利益を最も良く実現する道なのである。を不斷に明らかにし、自らも純化する能力を持たなければならぬのである。

連合赤軍の教訓と進歩と  
革命戦争と非合法黨の發展

田日陰階級斗争終はから考るるから銃の使  
用は常識であるが、日本警察と争うに於ては、  
共産主義社会の運動を統制的効果として  
銃暴力が専門化したのははじめてであり、  
日本帝國主義軍事機械力の進歩も、銃刀剣  
取締法の存在など、非常に特徴的である。  
こゝには、開拓維新によくよからず資本主  
義化第二次世界大戦後の大戦闘による  
兵士たる者等々一層して、日本軍の軍隊一  
の體はとての裏返りとしての槍と刀、鎗本  
主義、日本やヨーロッパの治政的誤解の  
不足と、實じてに頗るよほこましく、この様  
な階級斗争の本態は、ひづれ年々過渡期  
にて、この幾年間から少く變遷する中で  
うへており、労働者階級人民が革命的に  
奮起し、革命戦争を起つた時代から、また、  
ハーベンヌーの如きが、思ひ立てぬ銃弾  
戦はさう端緒を打つてゐるのである。

